

# ふるさとの昔話

## 大淵の雨ふり山



大淵の大坂に「雨ふり山」といわれているところがあります。この山へはいった者は雨に降られて、逃げ帰ってくる事が多く、村の人々からいつからともなく「雨ふり山」と呼ばれるようになったということです。

### 山にはいると大雨が

ある年の秋、働き者だと評判の若者が山へ仕事に出かけました。

まだ一度もはいったことのない山へはいり、仕事にかかろうとすると、薄気味悪い雲が空を覆い大粒の雨が降り出しました。若者は急いで道具を片づけると、雨がやみ青空が見えてきました。「これはよかった」とまた仕事にかかると、さつきより強い雨が降ってきました。

若者はなおも仕事を続けると、今度はすさまじい雷と大雨と一緒にやってきました。若者は驚いて一目散に山を逃げ出しました。村人たちは若者の話を聞いて「そんなばかなことがあるものか」と笑いました。二、三日たって、村人の一人がその山に

はいったところ、やはり雨に降られて逃げ帰りました。こんなことが繰り返されているうちに、いつか雨ふり山と呼ばれるようになりました。

### 言い伝えの看板を



武口美由紀さん

郷土のことをもっと知ろうと、2年前、雨ふり山の言い伝えを書いた看板を現地に立てた「ふじもとみどりの少年団」の少年団の武口美由紀さん(大淵二小6年)は「地元にもこんなおもしろい言い伝えがあつたんだなあ」と知り、改めて郷土のことに興味を持ちました」と語っていました。

## 地名の由来

えのお  
江尾



江という字は入江という意味があります。江尾村は、浮島沼の入江の奥だから、入江の尾という意味で江尾と呼んだものです。部落の中を流れる江川の江は、江尾の江からつけたものでしょう。

江尾の万騎沢は、天正7年武田勝頼が北条氏と戦ったとき、数万の武田軍がこの付近にたむろしたので、この名がついたものです。

## 古墳のはなし ⑫

### 古墳と祖先の生活



### 古墳時代の武器

古墳時代には武器が発達し、多くの種類の武具がつくられました。弓矢、剣などの攻撃的な武器が主だった弥生時代に対し、古墳時代にはよろいやかぶなどの防御的な武器もつくられ、武具がほぼ完成した時代です。

攻撃用としては主に太刀、弓矢、槍が使われていました。

太刀は刀身が真つすぐな直刀で柄、鐔、鞘などに飾りをつけたものがあります。特に柄の端につく柄頭は特徴的で、その形によって環頭太刀、方頭太刀、円頭太刀、頭椎太刀などがありました。弓矢は今のものとは異なる丸木弓で、長さ2倍ほどの長弓と1倍ほどの短弓があります。矢は丸木や竹製で全長80~85センチで矢の尻には2~4枚の矢羽根をつけ、先端には鉄製の鏃がつけられています。鏃には先のとがった尖根式、三角形や五角形の平根式などがあります。

### こちら編集室

あけましておめでとうございます。今年(うし)は丑年、モウ烈に生きるもよし、のんびりと人生を反芻しながら生きるもよし、とにかくお互いに、角をつき合わさずに仲よく暮らしたいものです…。